

明和改正謡本における舌内入声音と連声の注記

坂 本 清 恵

はじめに

明和二（一七六五）年、十五世観世大夫元章は、それまでの詞章を改訂して、出雲寺和泉掾より新たな謡本を刊行した。明和改正謡本である。田安家で改訂作業が行われ、田安宗武が主導、加藤枝直が関与したとされる。枝直の曾孫加藤千年によれば、枝直が明和改正謡本に関わる記述を残した『謡曲改正草案帳』に、改訂に際して、宗安が「謡曲謡本の謬誤多きを憂」い、賀茂真淵に改正を命じたのを、真淵が枝直に詢ったとある。いずれにしても、この明和の改正には、真淵の考えも反映されたといえるだろう。⁽¹⁾

詞章の改定について、これまでも多くの研究がなされ、清濁については、天野文雄によるその後の伝承に関する研究がある。⁽²⁾

本稿は、明和改正謡本にみられる舌内入声音と連声に対する注記を検討し、その日本語資料としての意義を考察する。

一 明和改正謡本の特徴

謡本は、胡麻章や節付けが施された楽譜であり、そこには発音に関わる注記も見出すことができる。謡本類は今まで日本語研究に活

用されてきたが、明和改正謡本もまた、伝承過程における謡の特徴的な発音を留めている可能性がある。

伊海孝充は、明和の謡本改正について次のように解説する。⁽³⁾

十五世観世大夫元章が従来の観世流の詞章を大改訂し、明和二年（一七六五）に出雲寺和泉掾より刊行した謡本。内外二百番、習十番の計二百十番の謡本だけでなく、目録兼作者付の『三百拾番謡目録』、『翁』の謡九種をまとめた『九祝舞』、謡物集『独吟八十五番』を含めた総称。①大半の曲の文句を見直し、時には曲の内容・構成にも改正を加えている、②節付に新しい工夫を施す、③発音どおりの振り仮名を片仮名で付す、④当時隆盛だった国学の影響が強い、⑤世阿弥時代への回帰を目指し古曲を復活させている、等に特色がある。この大改訂事業は元章一人で実現したわけではなく、後援者であった田安宗武や『謡曲改正草案帳』を著した加藤枝直等も深く関与していたと考えられる。明和本は大変不評だったため、元章死後、將軍家治の意向によりすぐに廃止され、観世流の詞章はそれ以前の正徳弥生本のかたちに戻されたが、現行観世流謡本にも明和本の影響が残存している。

記述のうち、日本語の資料として注目すべきは②③④⑤である。

③の「発音どおりの振り仮名を片仮名で付す」は、片仮名は漢字だけでなく、平仮名にもつけられている。漢字に付すものは振り仮名ではあるものの、発音どおりではない。対して平仮名に振られた片仮名は、発音を示すものである。

例えば、『羽衣』で、漢字に「叶^{カフ}まじ」6オ5とあり、平仮名で書かれた箇所「かなふまじ」3ウ・4オと、開合の異なる振り仮名が見える。漢字に対しては、発音を示すのではなく、当時の仮名遣いによって振り仮名が施されている。一方、平仮名に付された片仮名は、当時の仮名遣いの表記に、その発音を注記している。⁽⁴⁾

明和改正謡本では、オ段長音の開音に関わる平仮名への片仮名注記に、例えば「あふ〈合〉」を文字のとりの〈アウ〉ではなく、〈オヲ〉を振り、開合の区別をやめたことが分かる。日常語の「あふ」が〈アウ〉と発音するよう戻ったため、わざわざ平仮名に〈オヲ〉の発音を注記したのである。それまでは開合の区別を保つため、様々に工夫してきた謡であったが、終に開合の区別を止めたのである。そして、少し前の日常語で合音に合流した長音の発音を、日常での発音とは異なる新たな謡の発音として採用した。つまり、明和改正謡本は、オ段長音に対しては、新たな伝承を確立し、以降、それが古典作品を読み上げる際の基準となっていくのである。

③は、すべての振り仮名が発音とおりなのではなく、「平仮名」に付された片仮名のみが発音を示すために付された。

④については、賀茂真淵の『伊勢物語』や、『万葉集』の研究成果が取り込まれているとの研究がこれまでもあった。ことばに関する影響関係については、先述のオ段長音の開合の扱いがその例と

いえる。今後、さらに解明されていくことだろう。

また、②に関連しては、それまでの謡本にはない、発音注記〈ツメル〉〈含〉が詳細に付されていることも特徴である。この点、現在の謡本に近い形になったといえる。入声音を後続音によって〈ツメル〉と〈含〉とで発音し分けるのが、謡の伝承にも存する。以下、明和改正謡本の〈ツメル〉〈含〉の注記と、連声について、その注記状況を検討する。

二 舌内入声音と連声

謡の特徴的な発音といえば、舌内入声音のうち、後続が有声子音の場合に現れる鼻的破裂音であろう。現代は謡本に、観世流では〈色〉、宝生流、金春流、喜多流では〈ノム〉、金剛流では〈入〉が注記される。これに対して、無声子音に続く場合には、各流儀とも促音で発音され、〈ツメ〉などの注記がなされる。また、舌内入声音が母音に続く場合には[t]を一つ取り込んで、促音系連声として発音され、これもまた謡の特徴的な発音である。

「二一」舌内入声の発音の伝承

⁽⁵⁾ これまで、謡が中世の発音をいかに伝承しているのかを探ってきたが、日本語に摂取された入声音のうち、舌内入声は、促音と類似の発音であったために、母音の添加が遅れ、その発音を謡では現在まで伝えてきたと考えられている。

世阿弥自筆能本で舌内入声は小書きされるか、細字で表記されることが多く、母音を伴っていないことが観察できる。並み字「ツ」で表記されたものもあるが、喉内入声の例「ラツクワ」（落花）

「二」二 舌内入声音に対する注記

明和改正謡本における〈ツメル〉〈吞〉注記のある舌内入声音を
後続音との関係からまとめる。

〈ツメル〉を注記される舌内入声

① 母音に続く場合

花月〈ツメル〉は クハゲツタ『花月』

今日〈ツメル〉は コンニツタ『東岸居士』

日月〈ツメル〉は ニチグハツタ『安宅』

両舌〈ツメル〉は リヤウゼツタ『東岸居士』

一〈ツメル〉鉢〈ツメル〉を イツハツト『関寺小町』

花月〈ツメル〉を クハゲツト『花月』

御罰〈ツメル〉を ゴバツト『安宅』

年月〈ツメル〉を ネンゲツト『関寺小町』『道成寺』

必〈含〉滅〈ツメル〉を ヒツメツト『松垣』

夜念仏〈ツメル〉を ヨネブツト『誓願寺』

以上のように、助詞の「は」「を」という母音に続く〈ツメル〉
と注記された舌内入声は、タ行「タ」「ト」に変わる促音系連声を
示す振り仮名が付される。

以下は、子音に続く場合であるが、子音ごとにまとめて例を示す。

② k ky kw に続く場合

悉〈ツメル〉皆 シツカイ『杜若』

月〈ツメル〉宮 ゲツキウ『羽衣』

八月〈ツメル〉九月 ハチゲツキウゲツ『砧』

一〈ツメル〉句 イツク『花月』

熱〈ツメル〉苦は ネットク『葛城』

③ s sy に続く場合

一〈ツメル〉教と イツケウ『誓願寺』

一〈ツメル〉見 イツケン『杜若』『東岸居士』

御出〈ツメル〉家 ゴシユツケ『東岸居士』

時節〈ツメル〉刑戮 ジセツケイリク『盛久』

出〈ツメル〉家 シユツケ『東岸居士』

げつ〈ツメル〉けい(月桂)『松垣』

鞆〈ツメル〉鼓 カツコ『東岸居士』『自然居士』

説〈ツメル〉経者 セツキヤウジヤ『自然居士』

一〈ツメル〉曲 イツキョク『羽衣』『盛久』

一〈ツメル〉裏 イツクハ『自然居士』

仏〈ツメル〉果 ブツクハ『杜若』『誓願寺』『自然居士』

一〈ツメル〉切 イツサイ『自然居士』

実〈ツメル〉相 ジツサウ『東岸居士』

念仏〈ツメル〉三昧 ネンブツサンマイ『誓願寺』

八〈ツメル〉相 ハツサウ『布留』

一〈ツメル〉七日 イツシチニチ『布留』『誓願寺』『自然居士』

一〈ツメル〉心 イツシン『葛城』

喝〈ツメル〉食 カツシキ『花月』

退出〈ツメル〉しける タイシユツしける『盛久』

発〈ツメル〉心 ホツシン『盛久』

一〈ツメル〉寸の イツスン『盛久』

念仏〈ツメル〉す ネンブツす『誓願寺』

一〈ツメル〉世 イツセ『木賊』

七〈ツメル〉世 シツセ『木賊』

八〈ツメル〉千歳 ハッセンザイ『自然居士』
末〈ツメル〉世 マッセ『安宅』『杜若』『誓願寺』『松垣』『羽衣』
『盛久』『花月』『布留』

説〈ツメル〉者 セツシヤ『道成寺』

殺〈ツメル〉生 セツシヤウ『東岸居士』

殺〈ツメル〉生戒 セツシヤウカイ『花月』

達〈ツメル〉者 タツシヤ『柏崎』

菩薩〈ツメル〉聖衆 ボサツシヤウジュ『誓願寺』

八〈ツメル〉句 ハツシユン『盛久』

仏〈ツメル〉種 ブツシユ『木賊』

一〈ツメル〉所 イツシヨ『安宅』

一〈ツメル〉称 イツシヨウ『盛久』

一〈ツメル〉称一念 イツシヨウイチネン『三井寺』

④ tに続く場合

一〈ツメル〉体 イツタイ『誓願寺』

薩〈ツメル〉埵 サツタ『盛久』『自然居士』

時節〈ツメル〉只今 ジセツタイマ『盛久』

悉〈ツメル〉退散 シツタイサン『盛久』

仏〈ツメル〉勅に ブツチヨクに『誓願寺』

一〈ツメル〉点まで イツテンまで『盛久』

一〈ツメル〉天 イツテン『盛久』

月〈ツメル〉天子 グハツテンシ『羽衣』

仏〈ツメル〉転 ブツテン『東岸居士』

熱〈ツメル〉鉄〈含〉の ネットツの『松垣』

花月〈ツメル〉と クハゲツと『花月』

成仏〈ツメル〉と ジヤウブツと『道成寺』
菩薩〈ツメル〉と ボサツと『誓願寺』
hに続く場合

一〈ツメル〉遍 イツヘン『誓願寺』

一〈ツメル〉返の イツヘン『盛久』

しつ〈ツメル〉ほうじうまんの(七宝充滿)『羽衣』

心外無別〈ツメル〉法 シンゲムベツホウ『柏崎』

是生滅〈ツメル〉法 ゼシヤウメツホウ『三井寺』

説〈ツメル〉法 セツホウ『杜若』『東岸居士』『自然居士』

仏〈ツメル〉法 ブツホウ『木賊』『誓願寺』『東岸居士』

末〈ツメル〉法 マツホウ『東岸居士』

滅〈ツメル〉法 メツホウ『関寺小町』

⑥ rに続く場合

出〈ツメル〉離 シユツリ『花月』『東岸居士』

悉〈ツメル〉令滅〈含〉 シツレウメツ『盛久』

〈ツメル〉を注記された舌内入声には、母音に続く促音系連声がみられたが、これは現代語では母音を添加し、連声にはならない。現代の日常語とは異なる促音系連声が曲ごとに記述されたことが確認できる。また、現在の日常語では、無声子音に続く場合にも、母音を添加せずに、促音で発音される。例外として「七世」や助詞「と」に続く場合、有声子音であるラ行に続く「出離」や、語末の入声音は、母音を添加して使われる。

〈含〉注記をされる舌内入声音

次に〈含〉として注記され、鼻的破裂音で発音される舌内入声の

注記をみていく。

⑦ 区切り点があるか、後続音がない場合

一仏〈含〉。イチブツ。『盛久』『誓願寺』

九月〈含〉。キウゲツ。『砧』

花月〈含〉。クハゲツ。『花月』

大菩薩〈含〉。ダイボサツ。『誓願寺』

悉〈ツメル〉令滅〈含〉。シツレウメツ『盛久』

以上のように、語末を鼻的破裂音で発音することになる。言い切りが〈ツメル〉ではない点に、注意が必要である。

⑧ 母音に続く場合

獄卒〈含〉阿防羅刹。ゴクソツアバウラセツ『砧』

じゃくめつ〈含〉為樂と じゃくめつキラクと『三井寺』

夜念佛〈含〉いざや ヨネブツいざや『柏崎』

庵室〈含〉へ アンジツエ『自然居士』

先達〈含〉御酌 センダツオシヤク『安宅』

よるの念仏〈含〉を ネブツノ『誓願寺』

念仏〈含〉をも ネンブツをも『盛久』

一月〈含〉や、の イチゲツや、の『羽衣』

〈ツメル〉と注記され母音に続く場合は、①のように母音がタ行に変わる連声が表示されるが、〈含〉注記された舌内入声音が母音に続く場合は、「念仏〈含〉を」「ネンブツノ」「誓願寺」とナ行となる連声例がある。同じく助詞に続く「念仏〈含〉をも」「盛久」には振り仮名がない。他の例に発音注記がないのは、連続せずに区切るためである。「先達〈含〉」「安宅」は現在の観世流の謡本も同様であるが、宝生流では「センダチ」と母音添加している。⑦でみ

たように区切るときには、〈ツメル〉ではなく、〈含〉になる。才段長音開合の発音注記と比べ、漢字の振り仮名部分ではなく、助詞に続く部分に発音注記が行われないのは、連声せずに〈吞〉発音のみが注意されたとも考えられる。ナ行になる発音注記が、この時点では徹底していなかったのである。

⑨ g・gwに続く場合

花月〈含〉が クハゲツが『花月』

心佛〈含〉及衆生と シンブツギシユジャウと『柏崎』

発〈含〉願 ホツゲハン『自然居士』『誓願寺』

出〈含〉現 シュツゲン『布留』

⑩ zに続く場合

若我成佛〈含〉十方 ニヤクガジャウブツジツハウ『柏崎』

八〈含〉邪 ハツジヤ『誓願寺』

仏〈含〉事 ブツジ『杜若』『誓願寺』

諸仏〈含〉十〈ツメル〉方の ショブツジツハウ『自然居士』

仏〈含〉前に ブツゼンに『誓願寺』

⑪ dに続く場合

焦熱〈含〉大 セウネツダイ『東岸居士』

仏〈含〉道 ブツダウ『花月』『自然居士』

決〈含〉定 ケツヂヤウ『誓願寺』

⑫ nに続く場合

阿弥陀仏〈含〉なる アミダブツなる『誓願寺』

是三無差別〈含〉何うたがひの ゼサンムサベツナニうたがひ

の『柏崎』

そこつ〈含〉なる そこつなる『三井寺』

彈正大弼〈含〉仲国 ダンゼウノダイヒツナカクニ『小督』
 分別〈含〉なし フンベツなし『松垣』
 花月〈含〉に クハゲツに『花月』
 時節〈含〉に ジセツに『盛久』
 仏〈含〉日 ブツニチ『東岸居士』
 明月〈含〉に メイゲツに『三井寺』
 名月〈含〉に メイゲツに『小督』
 阿防羅刹〈含〉の アバウラセツの『砧』
 一日〈含〉の イチジツの『関寺小町』『松垣』
 おぼさつ〈含〉の おぼさつの『東岸居士』
 三熱〈含〉の サンネツの『葛城』
 時節〈含〉の ジセツの『盛久』
 成仏〈含〉の ジャウブツの『杜若』『砧』『三井寺』
 新月〈含〉の シンゲツの『三井寺』『小督』
 焦熱〈含〉の セウネツの『東岸居士』
 先達〈含〉の センダツの『安宅』
 即身即仏〈含〉の ソクシンソクブツの『安宅』
 桃実〈含〉の タウジツの『西王母』
 二仏〈含〉の ニブツの『木賊』
 若我成仏〈含〉の ニヤクガジャウブツの『誓願寺』
 熱〈ツメル〉鉄〈含〉の ネットツの『松垣』
 念仏〈含〉の ネンブツの『誓願寺』
 半日〈含〉の ハンジツの『木賊』
 菩薩〈含〉の ボサツの『杜若』『盛久』『東岸居士』
 夜念仏〈含〉の ヨネブツの『誓願寺』

落日〈含〉の ラクジツの『誓願寺』『羽衣』
 利物〈含〉の リモツの『布留』

呂律〈含〉の リヨリツの『関寺小町』

漢字音ではないが、ナ行に続く

千満〈含〉にて センミツにて『三井寺』

の例がある。「千満」の「ミツ」に対しての〈含〉の注記が行われている。「千満」は『音曲玉淵集』巻一にも「訓にても吞て謡フ」と挙げられている例である。

⑬ bに続く場合

恐れつ〈含〉べうぞ オソれつべうぞ『安宅』

これ例も⑫の「千満」同様に字音語例ではなく、『音曲玉淵集』に「おそれつへうぞ」として挙げられ、「訓にても吞て謡フ」としている。

⑭ mに続く場合

勝劣〈含〉見えざり シヨウレツ見えざり『西王母』

生滅〈含〉々已 シヤウメツメツイ『三井寺』

必〈含〉滅〈ツメル〉を ヒツメツト『松垣』

菩薩〈含〉も ボサツも『誓願寺』

夜念仏〈含〉申せ ヨネブツ申せ『柏崎』

⑮ その他

満月〈含〉真如の マンゲハツシンニヨの『羽衣』

先達〈含〉一さし センダツヒトさし『安宅』

呂律〈含〉妙なる リヨリツタへなる『西王母』

「満月真如」は、現在まで揺れがみられてきた。「月」〈ゲワツ〉に続く「真如」が無声子音であるにも関わらず、〈ツメル〉発音を

注記せず〈含〉とする。これは、③の単語内で無声子音への連続とは異なり、「満月」と「真如」とは連続せず、⑦同様の単語の区切れとし、区切れでは鼻的破裂音であったことによるものであろう。現在の各流儀では、金剛流が「満月真如」を受け継いでいるが、観世流、宝生流、金春流、喜多流の四流は「満願真如」である。正徳三年伝観世小次郎信光筆謡本、観世文庫室町末写本には「満月真如」とあり、室町期末の観世文庫承応二年十一世重清、十四世清親章とある本には「まんくはつしんによ」とした上に、朱で「つ」の上に「ん」を重ね左に振り漢字「満願」を添えている。古い謡本には「満月真如」と考えられる「まんくわつ」が見られる。音節末が、〈含音〉である〈グワツ〉と撥音〈グワン〉が大変よく似た音であったために、「月」と「願」が交代し、多くの流儀が「満願」を選んだ。

同様の例は、『江口』に「妄舌の」と「妄然の」にするものが挙げられる。世阿弥自筆能本で「モウゼツノ」とあるが、現在、宝生流で「妄舌」、他流が「妄然」で伝えている。どちらでも意味が通じるため現在に至ったのである。また、世阿弥自筆能本には「以漸悉令滅」を「イゼツシツリヤウメツ」『盛久』と、「以漸」を「イゼン」ではなく、「イゼツ」と記す例もみられる。これは、現在まで五流とも「イゼン」である。

「先達」呂律」は、それぞれ続く「一さし」「妙なる」と区切りがあり、⑦と同様の例と扱うことができる。単独での終止に〈ツメル〉ではなく〈呑〉が注記されたことになる。

三 撥音系連声

「三一」 撥音系連声の変化

現在の各流儀で、撥音系の連声は規則的に行われる。「エ」につづく場合は、宝生流は拗音の「ニエ」、他流は「ネ」となる相違がみられる。

世阿弥自筆能本では、圧倒的に非連声の例が多いが、後続音が「ア」「オ」「ワ」の広い母音に続く例のみに連声例と非連声例のゆれがみられる。「ウ」「ヨ」に続く用例はなく、「イ」「エ」「ヤ」が後続する場合には連声例をみない。撥音「ン」が独立性をもち、連声が規則的には起こらなくなっていたと考えてよいだろう。連声の例と、非連声の例とが両用されたことが、のちに連声を規則的に取り込む契機となったと考えられる。

『日本大文典』では、ヤ行とエについて拗音の連声になることが記載されるが、「因縁」については「インネン」とする。『日本大文典』は謡からの用例も多く、謡では音の渡りによって拗音形の連声で発音されることもあったのであろう。連声形で伝承していない語に対し意図的に連声を作ると、「エ」が[je]であったために拗音になったと理解すべきであろう。キリシタン資料では連声は表記されにくい。『日本大文典』からは、謡がこの時期に拗音形の連声を取り入れるようになったと考えることもできる。

『當流謡百番假名遣開合』元禄十年（一六九七）には撥音系連声を詳しく取り上げるが、「エ」に続く場合は「ネ」となり、「ヤ」「ヨ」は「ニヤ」「ニヨ」である。

『音曲玉淵集』享保十二（一七二七）年では、すべての母音音節に

続く連声例が見られ、「エ」に続く連声を「ネ」「ニエ」の二通り示し、ヤ行に続く場合には「ニヤ」「ニユ」「ニヨ」を示す。

謡は、撥音が長さを確保し、拍として独立性を持ち始めるのに反し、独自の発音として撥音系連声を取り込み、より複雑な伝承を行うようになったと考えられる。

〔三〕二 明和改正謡本の撥音系連声の注記

明和改正謡本では、連声のうち、撥音から母音音節に続く場合には、助詞には規則的に連声について注記するが、接頭辞から自立語へ続く場合、単語内の場合には連声で示されない。

① 助詞「は・を」に続く場合

縁は エンナ『三井寺』・帰雁は キガンナ『松垣』・狂乱は
キヤウランナ『柏崎』・虞舜は グシユンナ『木賊』・光陰は
クハウインナ『盛久』・観世音は クハンゼオンナ『松垣』・御
信感ほ ゴシンカンナ『盛久』・五体五輪は ゴタイゴリンナ
『卒都婆小町』・御本尊は ゴホゾンナ『誓願寺』・讒臣は ザ
ンシンナ『安宅』・知ざらむは シラざらんナ『木賊』・神剣は
シンケンナ『布留』・西南は セイナンナ『松垣』・とやらむは
とやらンナ『誓願寺』・女人は ニヨニンナ『道成寺』・人間は
ニンゲンナ『布留』・宝剣は ホウケンナ『布留』・文は モン
ナ『盛久』・亦能轉は ヤクノフテンナ『盛久』・和光同塵は
ワクハウドウチンナ『布留』
悪神を アクジンノ『布留』・縁を エンノ『杜若』・宴を エ
ンノ『盛久』・御簾を ギヨレンノ『盛久』・光陰を クハウイ
ンノ『盛久』・観世音を クハンゼオンノ『盛久』・剣を ケン

ノ『布留』・御前を ゴゼンノ『盛久』・執心を シウシンノ『松垣』・上人を シヤウニンノ『誓願寺』・主君を シユクシンノ『安宅』・善を ゼンノ『東岸居士』・多年を タネンノ『布留』・天を テンノ『松垣』・転変を テンベンノ『柏崎』・難を ナンノ『安宅』・女人を ニヨニンノ『道成寺』・人身を ニンジノ『卒都婆小町』・方便を ハウベンノ『布留』・諷誦文を フジユモンノ『自然居士』・北辰を ホクシンノ『西王母』・文を モンノ『盛久』・やらんを やらんノ『花月』

内陣へは ナイチンエは『柏崎』

また、助動詞「む」が母音音節「ヤ」に続く場合にも、連声例が示されない。

いはむや いワンヤ『卒都婆小町』
謡では「エ」が[je]で発音され、ヤ[ja]と同様にその連声が拗音「ニエ」「ニヤ」になる可能性があるが、明和改正謡本では、連声を示さない。世阿弥自筆能本以降に連声を積極的に謡の特徴的な発音として取り込みはじめ、拗音の連声が始まったが、明和改正謡本ではそれを摂り入れなかったと考えられる。現在、撥音から「エ」に続く連声に対して、「内陣へは」に「ニエ」を注記するのは宝生流で、他流は「ネ」である。「ヤ」に対しては宝生流以外でも「況や」に「ニヤ」を注記する。

助詞、助動詞は漢字表記されないため、振り仮名は発音注記として連声であるかどうかを示すことになるが、次のように助詞ではないが、漢字表記しない「あり」に続く場合にも、連声は示されない。

連声で発音され「ナリ」となれば、助動詞「なり」と解釈されるためであろう。

逆縁ありと ギャクエンありと『卒都婆小町』

出〈含〉現ありしぞかし シュツ〈含〉ゲンありしぞかし『布置』

後者の例は、世阿弥自筆能本でも「シユツゲンアリシ」「布置」であり、連声は示されない。

次に接頭辞「御（おん）」に続く場合をみる。

② 接頭辞「オン」に母音音節が続く場合

御上り候へ オンアガリ候へ『自然居士』・御遊び オンアン
び『花月』・御跡 オンアト『松垣』・御有様 オンアリサマ『松垣』
『柏崎』・御あはせ候 オンあわせ候『三井寺』・御痛はしく
オンイタワしく『羽衣』・御出 オンイデ『安宅』・盛久
『花月』・自然居士・御暇 オンイトマ『松垣』・小督・御命
オンイノチ『盛久』・御入 オンイリ『安宅』・木賊『盛久』・小
督『自然居士』・御うたひ オンうたひ『花月』・御うち オ
ンうち『花月』・御休 オンヤスミ『安宅』・御行へ オンユク
エ・小督・御代 オンヨ『自然居士』・御わかれ オンわかれ
『柏崎』

以上のように接頭辞「オン」から母音音節に続く場合には、平仮名に続く場合であっても連声例を全くみることがない。続く表記が漢字だけでなく、平仮名であっても連声を発音注記しないことから、接頭辞「オン」に続く単語との独立性を保った語を示しているのである。

世阿弥自筆能本では接頭辞「御」のつく「御イリ」「御イノリ」「御

ワカレ」などに連声例はないが、『當流謡百番假名遣開合』には、御歌 おんとはねる下うぬといふ心に

という連声例がみられる。現在の各流儀が「御入り」「御命」「御出」「御休」「御代」「御別れ」を「オンニリ」「オンノチ」「オンニデ」「オンニヤスミ」「オンニヨ」「オンナカレ」などとするのとは、大きく異なるところである。

③ 単語内で撥音に続く母音音節

三悪道 サンアクタウ『盛久』・卒都婆小町・塵埃 ジンアイ『盛久』・恩愛 ヲンアイ『東岸居士』・木賊

願以 グハニイ『自然居士』

因縁 インエン『安宅』・順縁に ジュンエンに『卒都婆小町』・段々壊 ダンタエ『盛久』・輪廻の リンエ『松垣』・安穩に アンランに『柏崎』・観音の クハンオンの『盛久』・卒都婆小町・観音力 クハンオンリキ『盛久』

今夜は コンヤは『木賊』・三井寺・山野 サンヤ『安宅』・

半夜の ハンヤの『三井寺』

単語内における撥音系連声例はみられない。しかし、漢字の振り仮名としての働きが強く、発音注記になっていないとも考えられるので、これをもって連声でなかったとは判断できない。現代語で連声読みが一般になっている「因縁」「輪廻」「安穩」「観音」と、非連声の「三悪道」「恩愛」「塵埃」「順縁」「今夜」「半夜」がある。

世阿弥自筆能本では、「三悪道」「三アクタウ」「盛久」であり、「三悪道」は、唇内鼻音と舌内鼻音の区別がある時代には「サンマクダウ」の発音がなされた可能性があるが、「三」「悪道」という語構成意識から、「サンアクタウ」と発音されたと考えられる。〔三

悪」道」と意識されれば、現行の謡のように「サンナクダウ」になったのかもしれない。

「塵埃 ジンアイ」「盛久」は「ジ（ン）ナイ」とする世阿弥自筆本、『謡曲英華抄』に連声例がある。「観音 クハシオン」は世阿弥自筆本の『盛久』『音曲玉測集』『謡曲英華抄』に「クワンノン」の例がある。「段々壊 ダンタエ」「盛久」は、世阿弥自筆能本では「ダン／＼エ」で連声を示さない。現在は宝生流が「ダンタンニエ」、他流が「ダンタンネ」である。「え」を「エイエ」とするか「エ」とするかで連声形が異なった例である。「ヤ」の場合には流儀より「今夜」を「コンニヤ」と連声させる場合と「コンヤ」のままの場合とがある。

四 考察

明和改正謡本における舌内入声の注記と、連声の現れ方についてまとめた。

舌内入声は、無声子音と有声子音ラ行に続く場合は「ツメル」とし、他の有声子音に続く場合は「呑」の発音注記がなされている。ラ行に続く場合には『音曲玉測集』にも「舌を巻て唱ふ」とあり、鼻的破裂音にはならなかったであろう。

また、舌内入声が語末や、語の区切れにくるときには、「ツメル」ではなく「呑」が注記される。これは、声明では語末に鼻的破裂音が表れないものとは大きく異なる⁶⁾。声明は鎌倉時代の入声音を留めているという。語末に「呑」は新規の発音といえよう。

促音系連声は「ツメル」からのタ行になる連声例が大半である。謡では有声子音の前の鼻的破裂音を謡独自伝承とするために、語末

にも使用するようになり、助詞「を・は」に続く場合にも「呑」を使えば、連声でなくても謡らしい発音となったのではないか。

撥音に続く母音に対する連声は、助詞「は・を」に続く場合のみ規則的に連声例がみられ、接頭辞「オン」から母音に続く場合と、単語内では連声が注記されることはない。世阿弥自筆能本での撥音系連声は、助詞「は」「を」に続く場合には『阿古屋』『布留』にも例があるが、単語内連声は『盛久』の例のみである。明和改正謡本では、接頭辞「オン」から母音に続く場合には平仮名例があり、連声注記をしていないことは確実であるが、単語内連声例は、漢字表記に対する振り仮名であるために発音注記とはいえない可能性もある。世阿弥自筆能本では、現在、連声が読み癖として残っている「因縁」を「インエン」「江口」「布留」と非連声で示している。あるいは、一で引用した伊海の分類した明和改正謡本の改正の特徴に挙げられている「⑤世阿弥時代への回帰」が、撥音系連声の発音にまで及んだ可能性もあるか。

おわりに

明和改正謡本は、現在の謡の特徴的な発音である鼻的破裂音を積極的に注記する。連声は、稽古手引書にみられるタ行、チャ行とナ行、ニヤ行のような複雑なものではなく、世阿弥時代に戻したと言えるほどなくなっている。舌内入声音と連声注記などを含めた明和改正謡本の発音にかかわる注記が、賀茂真淵など当時の国学とどのような影響関係にあるのかをさらに探究したい。

注(1) 『観世元章の世界』二〇一四年 檜書店

- 中尾薫（二〇〇六）「明和改正謡本と加藤枝直―『謡曲改正草案幀』の再検討から―」『芸能史研究』一七二（一九〇四七頁）芸能史研究会
- (2) 天野文雄（二〇〇三、四）「明和改正謡本と現代の能―濁音から清濁への改訂をめぐる―」『演劇学論叢』六、七日本演劇学会
- (3) 「元章小事典」『観世元章の世界』二〇一四年 檜書店
- (4) 坂本清恵（二〇二二）「才段長音の開合区別―謡曲はいづ、なぜ、それを断念したのか―」『早稲田大学日本語学会設立六〇周年記念論文集』一 ひつじ書房
- (5) 坂本清恵（二〇一五）『謡の連声』『能と狂言』一三 能楽学会
- (6) 浅田健太郎（二〇〇七）「声明譜から見た入声音の音価」『国文学攷』一九二・一九三

参考資料

- 国立国会図書館デジタルコレクション『改正本謡曲草案』
- 世阿弥自筆能本については、観世文庫アーカイブ、生駒山寶山寺所蔵貴重資料 電子画像集、月曜会編『世阿弥自筆能本集』（一九九七年、岩波書店）による。
- 『音曲玉淵集』（享保十二年）については、国会図書館蔵の複製、濱田敦編並解題（一九七五年、臨川書店）による。
- 『謡曲英華抄』は、京都大学文学部図書館蔵による。早稲田大学演劇博物館蔵本、江口惣吉校訂の大正元年刊本を参考にした。

受贈雑誌（二）

愛知教育大学大学院国語研究	愛知教育大学大学院国語教育専攻
愛知県立大学説林	愛知県立大学国文学会
愛知淑徳大学国語国文	愛知淑徳大学国文学会
愛知大学國文學	愛知大学國文學會
青山語文	青山学院大学日本文学会
愛媛国文研究	愛媛国語国文学会・愛媛県高等学校教育研究会国語部会
愛媛国文と教育	愛媛大学教育学部国語国文学会
大阪大谷国文	大阪大谷大学日本語日本文学会
大妻国文	大妻女子大学国文学会
大妻女子大学草稿・テキスト研究	大妻女子大学草稿・テキスト研究所
研究所研究年報	
岡大文論稿	岡山大学言語国語国文学会
お茶の水女子大学 國文	お茶の水女子大学国語国文学会
香川大学国文研究	香川大学国文学会
学芸国語国文学	東京学芸大学国語国文学会
學習院大學國語國文學會誌	學習院大學國語國文學會
學習院大学大学院日本語日本文学	學習院大学大学院人文科学研究科日本語日本文学専攻
學鑑	丸善